

昭和60年度指定調査研究

ベニズワイガニの生態と資源に 関する研究（抄録）

安達二郎

1. 目 的

日本海におけるベニズワイガニ資源の状態を診断し、この種の生活史にみあった適性漁獲量を試算し、最大持続生産性の維持を計ることである。

2. 研究の主旨

日本海に分布するベニズワイガニは、かご網で漁獲される。日本海西部海域での漁獲量は1972年までは、数千トン台で漸増してきたが、1973年以降は急激に増加し、1983年には約46,000トンとなった。しかし1984年の漁獲量は約45,000トンとなり、1983年を下回った。

このような漁獲量の経年変化をみると、近年の漁獲量の増加は、漁獲努力の増大と日本海西部の深海域の漁場開発に負うところが大きいと考えられる。

一方、漁獲されたベニズワイガニの魚体は年々小型化している。このように、漁獲量は増加しているにもかかわらず、魚体の小型化が現われるのは、近年では資源と漁獲の平衡した状態がくずれていることを示していると考えられる。昭和60年度はそのことを明らかにするため、島根県恵曇港と鳥取県境港の銘柄別漁獲量と銘柄別甲幅組成を用いて、日本海西部海域のベニズワイガニ資源を解析した。

3. 結果の概要

- 1) 恵曇港の漁獲物は、7つの年令群から構成されていた。
- 2) 各年令群の年令別平均甲幅と標準偏差から、年令—甲幅キーを作成した。
- 3) この年令—甲幅キーを用いて、恵曇港と境港の漁獲物甲幅組成を年令組成に変換した。
- 4) 年令組成から生残率を推定した結果、生残率は、境港では1977～1979年までは0.33～0.31、1980～1984年は0.23～0.4、恵曇港では1984年が0.25、1985年が0.32であった。
- 5) 資源診断の結果、1977～1979年の資源状態は健全であったが、1980～1984年では乱獲気味であると判断された。
- 6) 現在の乱獲状態を正常にもどすためには、漁獲量を現在の90%以下に下げることあるいは漁獲努力量を現在の80%以下にする必要がある。

詳しくは「昭和60年度指定調査研究 富山・島根・鳥取水産試験場共同報告書 昭和61年3月」を参照されたい。